

光の届かない闇の中に佇むお城の一室。

巨大な貝殻をしつらえたベッドの上で、ルカは甘いしびれで目を覚ました。

首元には精巧な海の装飾があしらわれた美しい首輪が繋がっている。

身体を包むのはシースルーの布とパールやシェルが煌めくいやらしい装飾だった。

乳首にはチェーンが連なっていて、そして腰にも巻かれた布は、局部や胸元は隠してくれない。

まるでなにか娼婦か、踊り子のような…。

何もかもが見覚えのないもので、ルカは動転した。

アルヴァに捕まり…海に引きずり込まれて…そして。

一体どうしてこんなところにいるんだったか？

「おっ♡♡♡♡」

ルカは急な律動に白い首元を逸らして喘いだ。

なんだ♡♡この脳髄を貫くような刺激は！？♡♡♡

甘くて苦しい快楽が腹奥を突き上げるので、ルカは舌を出しながらはあはあと息を吐いて、痺れを直視して目を剥く。

「はああんっ♡♡やっ♡♡なんで…なんでっ！？♡♡♡♡」

「おはよう…遅いお目覚めだな、俺の愛しのプリンセス」

じゃらっ…♡じゃらっ…♡と揺れる下品な装飾がつたった身体は、ぶるぶると痙攣しまくっている。

ぼこっ♡ぼこっ♡と突き上げにあわせて歪む下腹。

ルカの足は、大きな手のひらにモノみたいに掴まれてカエルのように開かれている。

開いた足の間、腹の上でくたびれ切っているルカのおちんぼのサイズが子供に見えるほど。

淫水焼けしていて血管がぼこぼこで、カタいやつが…尻穴にずっっぽり♡おさまりきって。

そしてその結合部に目をとられていたが、その黒々とした下生えから下。

アルヴァの下半身はシャチのように…雄大なひれと、ギラつくうろこに覆われていた。

「に、人魚…！化け物っ…！！♡♡だれかつ、助けっ…♡♡んあっ♡♡んぐうう♡っ♡ひあ♡♡…ど…！どけえっ！！！！♡♡」

グチュっ♡ぬちゅっ♡♡ばつっ♡バツッバツッバツッバツッ♡♡ばちゅっ♡ばちゅっ♡ばちゅっ♡ばちゅっ♡

「ルカ？ どうしてそんなにおびえた顔をする？ ひでえなァ…俺とお前の仲だろ。一日中を共有し…風呂も…共寝までしたのにな。人魚だと知った途端この好感度の駄々下がりよう…♡は一どんだけルカってピュアなわ

け？かわいすぎて愚かなルカ…。そんな化け物に隙を見せたのはどこのどいつだったっけ？城に手招き入れたのはお前だろ？なあ♡ルカ」

タンッ♡タンッ♡タンッ♡タンッ♡タンッ♡タンッ♡
タンッ♡タンッ♡タンッ♡タンッ♡タンッ♡タンッ♡

「んあっ…♡僕の恩人に仇なしておいて！！人扱いなどできるか♡傲慢だ…！！どけっ♡放せっ♡♡はあああ…ん…ッ♡やあっ♡あ…♡♡ああっ♡やっ♡ああっ♡こ…このお♡♡♡パンパンするのっ♡♡やめッ…～～♡♡♡」

パンッ♡パンッ♡パンッ♡パンッ♡パチュッ♡！！パチュッ♡！！パンッ♡♡！！！！パンッ♡♡♡！！！！パンッ♡♡♡！！！！パンッ♡♡♡！！！！パンッ！！パンッ！！パンッ！！パンッ♡♡♡！！！！！！

頭の上で冷ややかな声が響く。

抵抗する両手を、恋人のように指を絡めて頭上で繋ぎとめられる。

逃れようとする間もなく鼻筋がぶつかる勢いで唇を塞がれて、淫靡な接吻をさせられる。

そしてそこから酸素を与えられるように唇をついばまれた。

拒もうとした歯列の表面を齧られて、分厚くおおい舌が口のなかを蹂躪する…。

「ルカ。…思い出したか♡俺との口づけ。俺に求めた助け。俺にだけ見せた苦痛の可愛い顔…ぜーんぶ」

パンッ♡! パンッ♡! パンッ♡! パンッ♡! パンッ♡!
♡!!! ぱちゅっ♡! だちゅッ!! ♡♡だちゅッ!! ♡
♡だちゅッ!! ♡♡だちゅッ!! ♡♡だちゅッ!! ♡♡
だちゅッ!! ♡♡だちゅッ!! ♡♡バチュッ♡♡! バ
チュッ♡♡! バチュッ♡♡! バチュッ♡♡!!!!…バ
チュッ♡♡!!!

「ああッ♡♡あああんっ♡♡だえッらめええっ♡♡♡♡♡
♡♡はげし♡♡あ♡♡ひっ♡いぐッ♡いぐいぐいぐい
ぐッ……はなせええっ…♡…んほおっ…！！♡♡♡♡♡…
♡…あっ♡」

「おっと」

ぬりゅんッ！！！！！！♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡

ルカが暴れた隙に、アルヴァのおちんぼが運良く抜け出る。

ごりゅっ♡と前立腺をかすめ抜けたのにも大きく喘いでルカはベッドに伏せ落ちた。

がくがくがくっ♡♡♡♡ぶるぶるぶるっ…♡♡

「んんお♡っ…はぁあっ♡はぁ♡♡はぁあっ♡♡…ひい
いっ♡あひ…っ♡♡ふっ♡ふうっ…♡」

「そんな震えた足腰で…ここは深海の奥底だというのに、どこへ行こうってんだ？怪我をするぜ？ルカ…♡」

ガクつく腰を必死に引きずって、アルヴァから及び腰でずり上がる。

ルカは小さな口から涎が垂れるのも拭わず、必死に頭を働かせた。

ガクンと肩の力が抜け落ちて上半身が床につくばるが、そんなのもおかまいなしにベッドから降りようとする。
ぶびゅっ♡♡♡どろお♡♡と赤らんだアナルのふちから、孕ませるような大量のザーメンが垂れ落ちて、むっちりとした腿に垂れ落ちて、背後のアルヴァの目を肥やすだけであることも知らず。

足も腰にも力が全然入らない。

ルカは情けなくみだらに汚れた腹を見るような姿勢になってはいつくばってしまう。

その時、体を丸めたルカは自分の腹に刻まれた紋様に気づいた。

ほわん…♡とぼんやりとピンク色に光るその紋様は子宮のような絵をしていて、ルカの精液濡れの腹で淫猥に光っていたのであった。

「はあっ…はあ♡なっ…なにこれえ？♡♡」

「ルカ…お前は今水の中にいるのに、どうして呼吸ができているんだと思う？」

「あひっ！？」

「人魚の肉を食えば不死身。体液を吸えば海のなかでも生きることができること…知っているか？」

背後から足首を触られ、やがてじんわりとその大きな手のひらが腹の紋様まで辿り着く。

優しく温かい手のひらにたまらず情感にほうっとため息をつく、サディスティックにも突然腹をぐりっと押しつぶされ、「おおっ…♡」と声が漏れてしまう♡

「クク、俺から逃げるので必死で気づいてなかったって顔か？愛いな♡ああルカ…お前は何も知らなくてかわいいね。その腹のんは人魚の体液を接種した印だよ、ルカ。俺が気を失ったルカにたんまりと孕ませるほど射精したからね♡もうすぐ光が潰えちまうけどな♡…それ

でも逃げんの？」

アルヴァはじっとりと雄っぽく舌なめずりをして笑い、
ブロンドを優しくやらしく掻き上げる。

切れ長のタレ目をもっと細めて僕を愛おしいっていう
かのような熱のこもった目で見てくる。

目に人のような輝きはない。

化け物に手を伸ばしたら最期。ルカは昔に言われたしつ
けをぼんやりと思い出した。

背中から、頭頂から覗き込まれるようにその分厚い体躯
の影が、ルカを覆う。

両サイドにつかれた腕は、堅牢な檻みたいだ。

ぶるぶると肩が震え上がってしまうのは、これは怒り？
失望？それとも…興奮？

背後にぴったりとくっついたアルヴァのに臀部を昂り
で押し上げられて、さっきまで摩擦されすぎてねっとり
と痺れるような腹の奥が、きゅん♡とうずいた。

荒くなる呼吸に喘ぎながら、ルカは床に頬を埋め目元を
金の髪に隠したまま、尻をおずおずと捧げた。

「はあ…は…アルヴァ…♡おねがいだ…や、やさしく
えっちして…♡」

けぶるまつ毛をふるわせて、うつろな目元は赤みを帯び
ていた。

二人の背丈、それも人と人外の肉体差は子供と大人より恐ろしい。

アルヴァは猛る肉棒をルカの腹に押し付け、紋様光るルカの薄い腹を大きな手のひらで撫でる。

「ここまで挿入るから、歯食いしばって頑張ろうな」

アルヴァは好きな男の誘惑を喰らって余裕がないのか、力差も忘れてルカを壁際に抱きあげて、押しつぶすように立ちバックでプレスする。

抱き上げられた足ではルカはかかとが浮き上がってしまっ、ばたばたと抵抗していると、そのまま両足を抱き上げられて壁にのせられてしまった。

や、いやだ…こんな格好！！

後ろは窓で…！！

開放的な海が背景で…♡♡♡

ルカは半泣きで、潤み赤らんだ己の小さな下の口に、こぶしほどあるグロテスクなちんぽが押し当てられたのを眺めるしかない。

にゅぐう〜〜〜っ♡♡♡にゅぶ…っ♡♡♡ごりゅ…
♡♡♡ごりゅっ…♡ぬぶっ♡ごぶ♡ぬりゅうう♡♡♡♡
♡♡♡

「ああんっ♡♡おっ♡♡♡！お♡♡♡おっ♡♡♡おっ……～♡♡♡♡♡♡…♡？…？…♡♡♡？？」

「ルカ、ああ…甘い♡ルカがこんなに脇が甘いのは…俺への試練だったんだよなあ。早く気づいてやればよかったな～？」

ぱんッ♡ぱんッ♡ぱんッ♡ぱんッ♡ぱんッ♡ぱちゅっ♡ぱちゅっ♡ぱちゅっ♡ぱちゅっ♡ぱちゅっ♡

「あっ♡うっ♡♡！んあ♡いぎなりっ♡♡ぜんぶはいって…ああ♡ひあっ♡、なん…♡♡…まって…そこ…ッ、やあ…ッ…んお♡♡♡！！！」

「はーッ♡エロ可愛い…起きてからまんこキュンキュンじゃん。あのクソ雄に擦り付けられた臭いがくせえなあ…あー早くルカの全部を早いと俺の匂いですり替えてやらないと」

スパンッ！♡スパンッ！♡スパンッ！♡スパンッ！♡スパンッ！♡スパンッ！♡ズパンッ♡！！ズパンッ♡！！ズパンッ♡！！ズパンッ♡！！ズパンッ♡！！ズパンッ♡！！ズパンッ♡！！ズパンッ♡！！ズパンッ♡！！

「んんおおっ♡♡♡♡しんじやう♡おまんこきもちくてしんじやうからああ♡やだ♡ぼくはよい王子なのっにいいい～♡♡こんなっ♡ふしだらな♡♡声ッ

♡♡お♡お♡♡お♡おん♡おんッ♡んあああッ！！
♡♡♡！」

「そんなにお真面目に生きてたらさあ♡潰れちゃうぜルカ♡気づいちまえ、お前がえっちなことだーいすきで、俺のちんぽですぐまんこ濡らしちゃう可愛いメスだってこと、ばれちゃえばいいだろ♡そしたら何か？国民は美しい王子がえっちでお得だってこと、喜んでくれんじゃねーの♡」

「テキトーをいうなあッ♡ああ♡そこっ！！♡弱いとこ♡♡いやあッ！！♡いぐっ…！！いぐいぐいぐいぐううッッッッッッ♡♡♡♡♡♡♡お…♡お♡お♡お♡お…っ！！♡♡♡♡♡♡」

ルカを生かすためと称して、ルカはアルヴァの部屋に閉じ込められて毎朝毎晩アルヴァと肌を重ね、アルヴァのザーメンをオス子宮までたっぷり♡出しつくされるようになった。

朝から晩まで、ずっと、だ。

あの分厚い肉体に抱きしめられて、ワイルドな汗の臭いをたくさんかいで、そして輝くうろこの綺麗なヒレ備わった頑健な腰に足を絡めてはメスイキを覚えてしまう日々…だ♡

ルカは最初こそ生きるためと割り切った行為と考えて

いたけど。

最近はもう、キスを迫られながら中出しの感覚を味わっていると、迫ったその男らしい顔立ちにきゅんとしそうになってしまいそうになるし。

苦いと思っていた精液をお掃除として舐めさせられているときは、どうしてか腰がくすぐったく甘い感覚にしばれてしまうし…♡

無理やりなのに悔しい。悔しい…！

「ん、んう…♡」

「俺の前で考え事か？おーいルカ？俺以外の男のこと考えてんじゃねーだろうな」

「ち、違う…そんなふしだらなことは考えない。」

「ふうん」

ルカは感度を育てられきってしまった乳首のピアスチェーンを意地悪にひっぱられながら、ふてくされていた。

城にいたころのように、ベッドすら裸のまま共にして生活しているから…朝をS字結腸をぶち抜かれた衝撃で起きることもある。

そのたびにルカは顔から肩まで真っ白な肌を赤らめて舌を突き出して大声で喘いでしまうので、事後文句を言うと、アルヴァは「じゃあ声を出さないように練習でもするか」などとふざけたことをいうので、ルカは本気でげんこつをお見舞いしたりする。